

令和元年6月22日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02088

研究課題名(和文) ユリアヌスを中心とするペラギウス派第2世代の神学に関する思想的・実証的総合研究

研究課題名(英文) Historical, Empirical and Synthetic Studies on the Theology of the 2nd Generation of Pelagians represented by Julian of Eclanum

研究代表者

山田 望 (Yamada, Nozomu)

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号：70279967

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：西方教会最大の「異端」として知られるペラギウス派の第2世代に属するエクラヌムのユリアヌスの神学や神学的人間論は、アウグスティヌス最晩年の著書『未完の書』に収められた論争における性欲や結婚に関する見解の違いを精査した結果、独自の異端の見解などではなく、既存のギリシャ教父、特にアンティオケイア伝承の神学思想に基づくものではないかとの有力な手がかりを得た。第2世代のカエレスティウスによる「異端」的主張も、異端説などではなく、ペラギウス派が多用していた「小から大への論法」という修辭的発言の仮定的前提部のみが切り取られた結果、末梢的補足説明が中心主張へと意図的にねじ曲げられた可能性が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西方教会最大の異端と見なされてきたペラギウス派第2世代のユリアヌスが、最晩年のアウグスティヌスと戦わせた性欲やキリスト論に関する主張は、ギリシャ教父のアンティオケイア伝承に酷似する見解であった。後代ペラギウス主義と称された「人は恩寵なしに自力で救いを獲得できる」とのカエレスティウスの主張も、「不信心な異教徒が自力で救いに到達できるなら、尚更、神を知るキリスト者はより容易に救いに与る」との修辭的前提部に過ぎなかった。ペラギウス派は異端などではなく、アウグスティヌスの原罪論も正統派というよりは罪の遺伝を提唱した系譜やアレキサンドリア伝承の系譜に属することが明らかとなった思想的意義は極めて大きい。

研究成果の概要(英文)：Julian of Eclanum belonged to the 2nd generation of Pelagians, who were widely considered to be the worst heretics in the Western Christian Churches. However, this study tried to clarify that his theology was not heretical but rather strongly resembled those of the Greek Church Fathers, particularly those of Antiochian tradition. This study closely investigated the differences on ideas of sexuality and marriage written in the last work of Augustine. At the same time, this study made clear the high possibility that Caelestius, who belonged to the 2nd generation of Pelagians, was also not heretical, but whose rhetorical assertion was wrongly distorted by omitting the latter half of this sentence. Most significantly, this study made clear that the theology of the 2nd generation of the Pelagians, Julian of Eclanum and Caelestius, were not heretical, and that their theology and theological anthropology should be attributed to the correct historical tradition of the Antiochian thinkers.

研究分野：キリスト教教理史、教父学、キリスト教古代史、古代ローマ史

キーワード：ペラギウス派 エクラヌムのユリアヌス カエレスティウス アウグスティヌス 原罪論 性欲 アンティオケイア伝承 ネストリウス

1. 研究開始当初の背景

報告者は、これまで 20 年以上に亘って、ペラギウス主義の最初の唱道者として「原罪」の存在を否定した結果、アウグスティヌスとの論争に敗れ、西方教会最大の異端として排斥されたペラギウスの神学思想を研究対象として手がけて来た。報告者は、とりわけ、2008 年～2011 年に亘って行った研究(基盤研究 C: 課題番号 20520078: 「ペラギウス派神学の起源とオリゲネス主義からの影響に関する文献学的・思想史的研究」)において、ペラギウスの思想史的起源は、アウグスティヌスとのペラギウス論争に先立つ、いわゆるオリゲネス主義論争の担い手たちの思想にあるのではないかとの仮説を立て、おもにペラギウス自身の著作とオリゲネス主義論争に関わったエヴァグリオスやアクイレシアのルフィヌスとの文献学的依存・影響関係を分析考察し、さらに歴史的・思想史的解析と位置づけとを試みた。

その結果、歴史的な人脈関係からしても、ペラギウス論争で対立した両陣営とそれに先立つオリゲネス主義論争で対立した両陣営とにそれぞれ深い連携関係が認められ、これら二つの論争は、それ以前に考えられていた如く全く別個の論争ではなく、明らかに歴史的連続・依存関係が両者間に存することが明らかとなった。さらに、ペラギウスの著作に、アクイレシアのルフィヌスが翻訳したエヴァグリオスやバシレイオスの著作からの影響が強く伺えることが判明し、オリゲネス主義とペラギウス主義との橋渡し役として、アクイレシアのルフィヌスがきわめて重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。そして、最も際立った研究成果は、申請者が前回の科学研究中に行ったヴァチカン教父学研究所での 1 年半に及ぶ在外研究に、古文書資料の判読・解析を行っていた際、アクイレシアのルフィヌスの前任司教であったアクイレシアのクロマチウスの著作の中に、ペラギウスがきわめて多用した *Exemplum Christi* (キリストの模範) を初めとする「模範と模倣」の概念が同様の神学的コンテキストの中で繰り返し用いられていること、従って、両者の間には思想史的にもきわめて深い依存・影響関係が認められることを発見した。ペラギウス派の思想史的起源がオリゲネス主義論争の担い手たちの思想にあること、そのいわば仲介機能を、アクイレシアのルフィヌスとアクイレシアのクロマチウスという二人のアクイレシア司教による翻訳・著書が担っていたことが新たな事実として明らかとなった。

以上のペラギウス研究に続いて、報告者は、ペラギウス派第 2 世代に属するペラギウスの弟子たち、特にエクラヌムのユリアヌスの著作に注目し、彼と最晩年のアウグスティヌスとの間で交わされた最後の論争を収めた未完の大著『*Contra Iulianum (Opus Imperfectum)*』『ユリアヌス駁論(未刊の書)全 6 巻』の邦訳をこの数年に亘って手がけて来た。報告者は、本書の内容を文献学的に解析し思想史的に位置づけることによって、ペラギウス派第 2 世代の新たな思想的特徴やペラギウス派全体が最終的に西方教会最大の異端として排斥されるに至った経緯と本質的理由とを解明することが可能であり、またその必要があると考えた。以上が、今回の科学研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、西洋思想史において西方教会最大の異端思想として知られるペラギウス主義の担い手であった、エクラヌムのユリアヌスを初めとするペラギウス派第 2 世代が、アウグスティヌスやその陣営との論争を重ねる中でどのような神学思想を形成するようになり、またいかなる経緯で排斥にまで追い込まれていったのか、ペラギウス派第 2 世代の思想内容、思想形成の過程、排斥までの経緯について、思想史的、実証的に解明することを目的としている。その際、文献批評学の成果を駆使して文献学的に分析・検証することと並行して、例えば洗礼堂の形態の伝承系譜に関わる考古学的検証や、当時のモザイク画など宗教図像のイコノロジー的系譜研究の成果など、考古学や美術史の研究成果をも取り入れた総合的、学際的研究を目指すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、まずエクラヌムのユリアヌスの思想内容を、アウグスティヌスの 421 年の『ユリアヌス駁論』と彼の最晩年の遺作『ユリアヌス駁論(未刊の書)全 6 巻』を中心として文献学的・神学的、人間学的解析・考察を加え、それらの結果を神学思想・古代思想史的系譜に位置づける。それによってペラギウス同様に「原罪」ならびに「原罪論」を否定したユリアヌスが、ペラギウスの思想をどのように展開させ、いかに独自の見解へと発展させたのか、その経緯と成果とを解明する。アウグスティヌスについても、「原罪論」や「予定説」等、独自の見解を完成させるまでに、ユリアヌスとのどのような論争の経緯があったのかについて新たな見地からの解明を試みる。以上のようにペラギウス派第 2 世代の神学思想内容を文献学的・思想史的に解明すると共に、さらに、彼らの思想的共通性や地域的連携関係の解明を補完する目的で、洗礼堂の伝承形態や聖人洗礼に関連する図像等の考古学的、美術史的研究成果をも考察の対象とする。

4. 研究成果

本研究では、ペラギウス、ならびにペラギウス派第 2 世代に属する神学思想家、教会指導者として、エクラヌムのユリアヌス、カエレスティウス、シシリアン・ブリトンらペラギウスの弟子たちの思想を取り上げ、それら弟子たちの思想が、師と見なされていたペラギウスのどの

ような思想的特徴を継承しつつ、それらをどのように発展・展開させていったかについて解明した。研究全般にわたって、とりわけ、最晩年のアウグスティヌスと性欲や結婚を巡って激しい論争を行ったエクラヌムのユリアヌスの根本的な神学理解、人間論の特徴を浮き彫りにした。(論文2、3、5)その際、アウグスティヌスにとっていわば遺作となったOpus Imperfectum『未完の書』を対象として分析・検証を行った結果、ユリアヌスとアウグスティヌスとの間には、とりわけ性欲やキリスト論の理解・解釈において極めて大きな違いのあることが明らかとなった。他方、その相違点はユリアヌスのキリスト論や人間の自然本性に対する見解が、キリスト教思想史において類を見ない異端の見解というのではなく、むしろ、既存の伝統的神学思想、中でも小アジア・アンティオケイア伝承の流れを汲む神学的人間論に基づくものではないかとの有力な手がかりを得ることができた。

アウグスティヌスの神学的人間論についても、すべての人間が等しく備えている性欲を、人祖アダムとイブが罪を犯した原罪の結果、人間が罰として有するようになったものであり、基本的に神からの恩寵の域外に存する悪であると理解する解釈は、彼以前のキリスト教主流派というよりも、P. Beatrice 教授の言葉を借りれば、エンクラティス派やメッサリアン派などに見られる遺傳的罪を主張した系譜に属するのであり、性欲の捉え方の傾向については、管見では、全く同じとは言えないが、キュリロスをはじめとするアレキサンドリア学派の人間観に近いことは間違いない。それとは対比的に、エクラヌムのユリアヌスは、どこまでも性欲を善なるもの、それ自体は罪でも罪責でもなく、神から授けられた自然本性に属するものと理解する。さらに本研究では、キリスト論と性欲を巡る両者の解釈の違いを浮き彫りにする過程で、アウグスティヌスは、キリストに悪が存在したはずがないが故に、男性の精子によらず聖霊によってマリアの胎に宿ったキリストには性欲は存在しなかったと理解し、ここに性欲をキリスト論と結びつける観点を持つに至ったことが明らかとなった。対するユリアヌスは、キリストに人間一般に存した性欲がなければ、キリストは人類に罪を克服する意志の模範となり得なかったのではないかと反論し、ペラギウスに特徴的な概念であった模範と模倣の機能とキリストの性欲とを結びつけていることが明らかとなった。本研究では、以上のユリアヌスによる性欲理解、ならびにキリスト論的性欲解釈は、東方神学の中でもアンティオケイア伝承の理解にきわめて近いものであることを論じた。以上のように、アウグスティヌスとペラギウス派とは、前者がキリスト教正統派に属し、後者はそれとは異なる異端であったというのではなく、両者の神学思想を支える基本的枠組みそのものが異なっており、人間の自然本性やキリスト論に関して、前者はアレキサンドリア伝承の流れを汲み、後者はアンティオケイア伝承の流れに近接するものであり、この異なる伝承に基づいた異なる人間論が、「ペラギウス論争」が生じた根本的な要因であったと結論づけることができる。(論文1、2、4、5、図書2)

続いて、本研究では、アウグスティヌスの神学的人間論はアレキサンドリアのキュリロスを代表とするアレキサンドリア学派に特徴的な人間論であり、対して、ペラギウス派の神学的人間論はアンティオケイア伝承に特徴的なものであったことを、その後のペラギウス派の排斥にまで至る歴史的経緯においても解明した。すなわち、近年新たに発見されて注目されるようになった、アウグスティヌスがアレキサンドリアのキュリロスに宛てた書簡(ディヴジャック・レターズ)によれば、アウグスティヌスがペラギウス派の排斥に関してキュリロス陣営の関心・協力を得ようとしていたことが明らかとなった。それに対して、エクラヌムのユリアヌスは、アウグスティヌスとの論争に敗れた後、コンスタンチノーポリスのネストリウスの元に逃れたことから裏付けられるように、神学的人間論における共通性は教会政治的人脈においても共通するものであったことが明らかである。最終的に、ペラギウス派第2世代のユリアヌスは、キュリロスとネストリウスとのキリスト論をめぐる対立抗争に巻き込まれ、ネストリウス派と共に排斥されてしまったのである。(図書1、論文2)

ペラギウス派第2世代に属するカエレスティウスについては、ディオスポリス司教会議において異端視された、「神の恩寵がなくとも人は自力で救いを獲得できる」というカエレスティウスの命題について、ペラギウス派が頻繁に用いていたレトリックの一つである「小から大への論法」が誤解されてしまった可能性を指摘した。(図書2、論文2、4)すなわち、「神を信じていない異教徒でさえも救いを得ることができるのであれば、なおさらのこと、神の恩寵を得ている私たちはより容易に救いに到達することができるであろう。」という修辭的論法の前半部分のみが切り取られ、異端の見解として断罪された可能性が高い。とすれば、思想史的にペラギウス主義と称される神学的見解は、この修辭的論法の前半部分のみが一人歩きした結果であったと言える。

最後に、本研究では、ペラギウス派の神学思想や神学的人間論に関する思想史的考察のみならず、洗礼盤の形態やモザイク画などに見られる図像学的観点からも、ペラギウス派の神学思想を跡づけることが可能ではないかとの観点から、洗礼盤の形状や特定のモザイク画の図像学的表象の分析・考察をも取り入れた。結論のみを述べるならば、おしなべて仮説の域に留まるものであるが、初期キリスト教時代以来の洗礼盤の形状に、より古いものとしてギリシャ十字形から六角形の洗礼盤と、より新しい八角形(オクタゴン)の洗礼盤が存在する。ペラギウス派との繋がりが明らかとなったアクイレイアのルフィーヌスやアクイレイアのクロマティウスといった司教を輩出したアクイレイア教会の洗礼盤は、当初ギリシャ十字形であったものが、後に六角形に作り変えられたものである。それに対して、アウグスティヌスがアンプロシウスから洗礼を授けられたと伝えられるミラノ教会の洗礼盤は八角形(オクタゴン)であり、アン

プロシウスの主張からも、これはエルサレム教会の8角形の洗礼盤に倣ったもので、そもそもユダヤ教における出生後8日以内の割礼に洗礼が取って代わったことによるものと推察される。ユダヤ教の割礼に洗礼が取って代わったという場合、明らかに幼児洗礼の実践を前提としており、原罪思想と幼児洗礼とが結びついた西方教会においては洗礼盤も8角形に造り替えられていったものと推察される。それを裏付けるように、ローマ市内ラテラーノ聖堂付属洗礼堂の洗礼盤は8角形であり、北アフリカにおいても、アウグスティヌスの指導下におかれたカトリック教会では8角形の洗礼盤が見られるものの、それ以前のドナトゥス派教会の洗礼盤としてはギリシャ十字形や6角形のもの確認されている。ペラギウス派は、成人洗礼を重視し幼児洗礼については緊急洗礼としてしか行っておらず、この点では、ヨアンネス・クリュソストモスら、アンティオケイア伝承の見解と全く同じであり、その点からも、アクイレイア聖堂の洗礼盤同様に、ギリシャ十字形ないし6角形の洗礼盤を使用していたと推察される。少なくとも、割礼や原罪思想との繋がりが想定される8角形ではなかったと考えられる。

さらに、4世紀末から5世紀初めにかけて、カタコンベ内のフレスコ画や洗礼堂壁面のモザイク画に、成人洗礼の図像ばかりでなく、「教師としてのイエス」、「掟の授与(Traditio Legis)」、あるいは「髭のない笑顔のイエス」といった図像が確認できる。これらの図像は、神学的内容からして原罪論確立前の特徴を示すものであり、これも結局は仮説の域を出ないが、ペラギウス派の神学思想を表明したものと推定することは難しくない。とりわけ、サンタ・コスタツァ霊廟内の「掟の授与(Traditio Legis)」のモザイク画に描かれたペトロが手にする文書には、当初、「Dominus Legem Dat(主は掟を授ける)」との文言が記載されていた。これが、後に、「Dominus Pacem Dat(主は平和を授ける)」に書き換えられており、ここに、西方教会が、当初はペラギウス派のモットーの一つであった、「キリストの新しい掟」を示す文言を記していたものが、ペラギウス論争終結後、教会が一致と平和を強調するようになったとの神学的人間論における歴史的転換が反映されていると推察される。(図書1)

以上の研究成果を、報告者は、オーストラリアの国際学会 Asia Pacific Early Christian Centuries Studies (APECCS) にて三度に亘って発表し、その内容は、次の[雑誌論文]1、2、5に記載されているように、国際的に知られた出版社である Brill が出している学術誌 *Scrinium* の Vol.11, Vol.14, Vol.15 に掲載された。また、国際的に権威のある4年に一度、オクスフォード大学にて開催される International Patristic Conference においても2015年に発表を行い、その成果は Peeters から出版されている国際的権威ある学術雑誌、*Studia Patristica*.Vol.98, に掲載された(論文4)。以上に加えて、日本における西洋中世に関する最大の学会である中世哲学会の2017年シンポジウムに、ゲスト・シンポジストとして招待され(学会発表5)その論文は、国内において権威のある学術雑誌『中世思想研究』に掲載された。(論文3)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

(1) Nozomu Yamada, 'Pelagius' View of Ideal Christian Women in his Letters: Critical Perspectives of Recent Pelagian Studies Comparing Chrysostom's View in his Letter to Olympia', *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography* Brill, vol.15, refreed, (in Print).

(2) Nozomu Yamada, 'Rhetorical, Political, and Ecclesiastical Perspectives of Augustine's and Julian of Eclanum's Theological Response in the Pelagian Controversy', *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, Brill, vol.14, refreed, 2018年11月, pp.161-193.

(3) 山田 望, 「ペラギウス派による原罪論批判の本質と課題 悪は『善の欠如』であるか?」、『中世思想研究』(中世哲学会編) 第60号、2018年9月、pp.115-123.

(4) Nozomu Yamada, 'Pelagius' Narrative Techniques, their Rhetorical Influences and Negative Responses from Opponents Concerning the Acts of the Synod of Diospolis', *Studia Patristica*, 98, Peeters, refreed, 2017年11月, pp.451-462.

(5) Nozomu Yamada, 'What Is the Evil to Be Overcome? Differences between Augustine's and Pelagius' Views on Christ's Life and Death', *Scrinium: Journal of Patrology and Critical Hagiography*, BRILL, Vol.11, refreed, 2015年11月, pp.160-180.

[学会発表](計7件)

(1) 山田 望, 「ペラギウス派神学における自由意志論と女性観」, 上智大学中世思想研究所主催講演会、上智大学中世思想研究所、2019年2月24日。

(2) Nozomu Yamada, ' Change of Views on Ideal Christian Woman in Late Antiquity - From Early Eastern Traditions to the Pelagian Controversy - ', シンポジウム「東方キリスト教と女性(Women in Eastern Christianity)」, 教父研究会, Women to Con-Viviality--In/Ad Spiration to Convivials, 2018年10月28日。

(3) Nozomu Yamada, ' Pelagius ' View of Ideal Christian Woman - A Watershed from Early Christianity via Chrysostom to Augustine - ', Asia-Pacific Early Christian Studies Society,12nd Annual Conference, Okayama, 2018年9月13日。

(4) 山田 望,「女性の尊厳と自由意志 – ペラギウスによる構造悪・原罪論批判の一要点 -」, 2018年日本基督教学会学術大会、南山大学、2018年9月11日。

(5) 山田 望, [シンポジウム提題] 「ペラギウス派による原罪論批判の本質と課題 悪は「善の欠如」であるか?」, 中世哲学会第66回大会、岡山大学、2017年11月12日。

(6) Nozomu Yamada, ' Political and Ecclesiastical Perspectives of Augustine ' s and Julian of Eclanum ' s Theological Response in the Pelagian Controversy, Asia-Pacific Early Christian Studies Society 11th Annual Conference ' , Melbourne, 2017年9月25日。

(7) Nozomu Yamada, ' ' Rhetorical ' Controversy between Augustine and Julian of Eclanum – Different Anthropologies of Both Polemists and Social Backgrounds - ', Asia-Pacific Early Christian Studies Society,10th Annual Conference , Saint-Petersburg State University for Aerospace Instrumentation, St.Petersburg,Russia, 2016年9月10日。

[図書] (計 2 件)

(1) 山田 望, 「ペラギウス派第二世代による原罪論批判の展開と図像学的・考古学的痕跡」, 『「原罪論」で紡ぐキリスト教思想』, 上智大学中世思想研究所編、(2020年 知泉書館) (出版・掲載決定済み)

(2) Nozomu Yamada, ' Change of Views on Ideal Christian Woman in Late Antiquity - From Early Eastern Traditions to the Pelagian Controversy - ', *Contribution of Women to Con-Viviality, In/Ad Spiration to Convivials*, Ed. Jean H. Miyamoto, Kyoyusha, 2019年3月, pp.135-153.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。